

第2回特色ある県立高校づくり懇談会
議事録

高校教育課

【事務局】

定刻となりましたので、ただいまから「第2回特色ある県立高校づくり懇談会」を開会します。会議の進行を務めます長野県教育委員会高校教育課高校改革推進役の今井です。どうぞよろしく申し上げます。

開会に当たり、長野県教育委員会の内堀教育長からあいさつを申し上げます。

【内堀教育長】

ご多忙のところ本日ご出席を賜り感謝申し上げます。今回は高校現場、特に職業高校の雰囲気を感じていただくために、松本工業高校を会場にさせていただきました。また、本懇談会に先立ち、高校生の声を聴く機会も設けさせていただいております。

本日は、「県立高校の入口出口」ということで、前回ご議論いただいた「そもそも高校とは」を踏まえた上で、学科の構成比や募集定員の決定方法等について幅広く意見交換をしていただく予定です。構成員の皆様には、幅広く様々な観点から、ぜひ活発なご意見をいただくことをお願い申し上げます、挨拶とさせていただきます。

【事務局】

次に、出欠状況のご報告をします。白馬インターナショナルスクール理事の堀井さん、松本蟻ヶ崎高等学校校長の鳥谷越さんは欠席となります。なお、株式会社ナイアンティック クリエイティブディレクターの野村さん、長野県PTA連合会役員の石坂さんはオンラインでの参加となります。また、本日オブザーバーとして阿部知事も出席しております。

会議事項に入る前に、本日の会場の松本工業高校の生徒による発表をお願いしたいと思います。発表内容については「ドローンによる獣害対策～産学官連携による～」についてです。

それでは、発表をお願いします。

【松本工業高校生徒】

＝産学官連携ドローンによる獣害対策についての発表＝

【事務局】

意見交換に入る前に、本懇談会の公開についてご説明いたします。本懇談会については会議を公開で行うとともに、会議資料及び議事録、また撮影した写真等について、県のホームページ等へ掲載するとともに、希望する構成員へ写真を提供しますので、ご承知おきください。

また、懇談会の模様をライブ配信するとともに、議事録を作成するため、録音します。併せてご承知いただきますようお願いします。

次に、資料の確認をします。お配りいたしました資料は、「次第」、「第2回目配布資料」、「構成員の皆様から提出いただいた資料2点」となります。ご確認をお願いします。

それでは会議事項に入ります。進行は、本懇談会座長の信州大学教授の村松さんをお願いします。

【村松座長】

はい、それではよろしくお願ひいたします。

松本工業高校さんの素晴らしい発表、その前の高校生との懇談でも、いろいろ前向きなお話に心洗われました。それを受けまして今日の会議充実したものになればと思います。

それでは議事に入ります前に、前回ご欠席の委員の皆様からご紹介いただければと思います。最初にK O A株式会社取締役会長の向山様からお願いいたします。

【向山構成員】

今紹介いただきました、地元で電子部品企業の会長しております向山です。前回は都合で欠席をいたしましたけれども、今日は楽しみに出てまいりました。どうぞよろしくお願ひをいたします。

【村松座長】

ありがとうございます。続きまして、株式会社ナイアンティック クリエイティブディレクターの野村様、オンラインで本日はシンガポールから繋いでいただいていると思います。一言ご挨拶をお願いいたします。

【野村構成員】

ご紹介ありがとうございます。株式会社ナイアンティック クリエイティブディレクターの野村といいます。今日はリモートで参加させていただきます。よろしくお願ひします。

【村松座長】

ありがとうございます。それでは早速議事に入りたいと思います。本日のテーマでございますけれども、冒頭お話がありましたように、県立高校の入口出口でございます。最初に資料の説明を事務局の方からよろしくお願ひいたします。

【事務局】

以下の資料に基づき説明

- ・ 特色ある県立高校づくり懇談会 第2回目配布資料
- ・ 構成員提出資料（白馬インターナショナルスクール 堀井理事）
- ・ 構成員提出資料（理文塾 安原塾長）
- ・ 構成員提出資料（松本蟻ヶ崎高等学校 鳥谷越校長）

【村松座長】

はい、ご説明ありがとうございます。たくさんの資料を整理いただきまして感謝申し上げます。とりわけ、本日の中心の資料5で取りまとめていただいた入口出口、現在の教育委員会の方での入口出口対応、これを踏まえ、県立高校の入口出口、このような話を展開できればと思います。進行としましては休憩を挟みまして、前半の方で学科の定員等といった入口のお話、それか

ら後半の方で出口の話ということでその専門以外の進路を選ぶことなど、この辺の論点について進めていければと思います。

まず、最初に、資料についてご質問等があればいただければと思いますが、いかがでしょうか。どの点からでも結構でございます。はい、向山様よろしく願いいたします。

【向山構成員】

さきほどの高校生との対話（懇談会前に実施した「高校生の声を聴く会」）をずっとやったのですけれどもね、ABCDEですか、5つのテーブルであったのですけどね、聞き取れないのですよね、声がね。僕らの声も高校生の声も非常に聞き取りにくくて。教室がいっぱいあると思うので、AならAはこのクラスへ行ってください、Bはこのクラスに行ってくださいってやってもらえれば、静かに高校生と1時間対話ができたんじゃないかなと思うので、特に僕の隣のところにいたクラスには元気のいい高校生がいて、その子の声はほとんど聞こえたのだけれど、同じテーブルの高校生は半分ぐらいしか聞こえなかったのですね。こういうことをやる時には、そういうこともちょっと考慮していただいて、せっかく1時間の時間を設けてくれたのでしっかりと高校生たちと対応するにはやっぱり5つの組を1クラスずつに配分してもらえば本当にゆっくりとした対話ができたとと思うので、次回、もし同じようなことをやる時はその辺を是非考えてもらえればありがたいなというのが希望ですので、今の村松先生の質問とは違いますけどお願いします。以上です。

【村松座長】

ありがとうございました。今いただきましたご意見につきましては次回以降ですね、活かしていただくということで、是非、事務局の方でご検討をよろしく願いいたします。ありがとうございました。

その他はいかがですか？はい、伊佐治様、よろしく願いします。

【伊佐治構成員】

ただいま説明をいただきました5ページの入口出口のところにあります、一番真ん中の一番上にあります、入口の対応の「中学生の希望をベースに募集定員の決定」というのがありますが、この中学生の希望というのはどういうふうな方法で、どういう方を対象に掴んでいるのでしょうかということをちょっと教えていただけたらと思います。

【村松座長】

こちらの事務局の方でいかがでしょうか。

【事務局】

はい、中学生の希望については、一番大きなものは、第1回の予定数調査というものを10月に発表しておりまして、その時点での中学3年生の進路希望というのは、先生方の指導が入ってない状態での純粋に行きたい、学びたい学校を選んでいるというようにこちらでは捉えており、その希望調査をまず一番大きな資料として、毎年の傾向とともに、私達のデータとしているということでございます。

【村松座長】

いかがでしょうか。

【伊佐治構成員】

私、市町村の教育長をしているのにこんなこと聞くのはちょっと恥ずかしくて申し訳ないのですが、私は教員出身ではないものですから先生方にお聞きしたいのですが、10月のその調査というのは事務局のお話ですと、その進路指導がほとんど入らない状態というようにお聞きしたのですが、例えば松本市内の現状を考えますと、偏差値で実際には輪切りになっているのではないかとということがあって、おそらく本人がご両親と相談をする中で、本当の純粋な希望っていうのは、10月の時点では言い切れないのではないのかなっていう感じがちょっといたしますけれども、その辺はいかがでしょうか。

【事務局】

確かにそういったことは事実としてあるのかなというようには認識しておりますけれども、一方で、例えば農業科ですとか工業科ですとか商業科と、それから普通科。どこの、どういう学びを選択するかというところは、ある程度やっぱり生徒の希望が反映されているのではないかなと。偏差値というのは確かに大事な観点ではあるのですが、そういった学科を選択する際には、それとはまた違った視点があるのではないかなというようにこちらでは考えています。また、お配りした資料の13ページをご覧くださいただければと思うのですが、第1回の予定数調査の際に、希望した学校と実際に出願した学校がどのような関係にあるかということ、アンケート調査したものでございますけれども、これを見ると、7割近くの生徒が、やはり、この段階で手を挙げた学校、学科に志願をしている。あるいは変更する場合も、別の高校の同一学科であったりとか、ある程度この傾向も踏まえた上で分析をしているというところでございます。

【村松座長】

よろしいでしょうか。

【伊佐治構成員】

ありがとうございました。先ほど高校生に聴き取りをした中でも、本当に、あの中学校を出る段階で、結構クリアにこういうことをやりたいからここを選んだっていう子どもさんもいらっしゃったので、よく理解できました。

【村松座長】

ありがとうございました。その他、いかがでしょうか。はい、どうぞ。

【阿部知事】

オブザーバーなので、あまり発言しないようにしようと思ったのですが、今、伊佐治教育長がおっしゃった論点は、私もずっとかねてから問題提起をしている論点で、ノーチェックで進んではまずいなと思って発言しますが、私も保護者の方たちと話をすると、先ほどまさにおっしゃったようなことを言われることが結構あります。要は、大体この地域で君の成績だったらこの辺だよみたいな感じの、なんとかなしの相場観があって、そういうことで選んでしまっ

てるんじゃないかっていう話もあるので、ここはぜひちょっと教育関係者の皆さんにはそんなことないんだっていうのか、いやそうだから何か少し考えなきゃいけないねっていうのはちょっと議論していただいて、かつこの学科の選択っていうのも、今、長野県が提供している学科に限っているので、例えば介護学科みたいなのは長野県にはないですね、観光も白馬だけで、要するに地域的に限定されているので、そうすると本当は観光やりたいけれども例えば飯田の子供が白馬まで行くかって言ったら多分なかなかそういう選択はしないので、そういうことも考えないと、本当にまず子供たちの希望に即した学科でいいのかっていう以前に、子供たちの希望というのはどうやって本当に把握すべきなのかというのは、多分本質的な問題としてあるんじゃないかなというふうに思いますのでちょっとご議論いただければありがたいなと。

【村松座長】

はい、ありがとうございます。今、提起いただいた話は議題の中に入ってくる話かと思えますので、関連したところで何かございますか。はい、安原さん。

【安原構成員】

塾をしている者ですので、今の話を非常に興味深く聞きました。10月の予定数調査ですね、やはり、実際には保護者の方も皆ご存知だと思いますが、進学希望のお子さんはだいたい塾に通っているのが現状で、塾ではもっと早く進路指導をいたします。模試などで偏差値等も常に提示されており、もっと早い段階で志望を決められているというのが現状だと思います。

その中で本当に自分の一番行きたいところを選ぶというのは、やはり、前にも言いましたが、情報が不足しているというところで、特に工業系とか農業系、そこを希望する子はたまにいますが、よほど親が農業をしているとかそういう何かがない限り、選ぶチャンスがそもそもないかなと思います。多くの子は10月の段階では偏差値によって志望校を調整し終わっているところはあると思いますので、10月の段階での子供たちの希望かということ、何とも言えないところがあると思います。

【村松座長】

はい、ありがとうございます。今のこの希望をどういうふうに把握していくのかというところで論点は進んでいますけれども、どうでしょうか。関係したところで、どんどんお出しただければと思いますがいかがでしょうか。今、安原様の方から塾での実態等もお伝えいただいたところですが、それから今、知事の方からも提供している学科の偏在ですかね、そこについても提起いただいているところですが、そういう点からもいかがでしょうか。はい、それでは小木曾さんお願いします。

【小木曾構成員】

今のことに関連してというところで、普段思っているというよりは今日この場で今お話を聞いて、何となく現場にいる感覚として思ったことなのですけど、やはり、偏差値縦割りでの学校選択みたいなのは存在するだろうなというのは、感覚としてあります。資料の5ページのところの普通科の選択理由のところ、もちろんと言っていいのかわからないですけど、特色があるからというような理由がないわけですけど、もっと偏差値以外のところでいろんな学校がこの学

校ではこれが勉強できるからここに行きますっていう、特色というか魅力みたいなのがないと、その偏差値っていう枠は破れていかないのかなというように思います。その専門科とか商業科を作るのも並行してかもしれませんが、まだ、やっぱり中学校3年のところで、どこの科に行くっていうのが進路選択できない子もたくさんいると思うので、普通科を選択する中でも、こういう特徴があるとかっていう、そういう選び方ができるような現場としては特色を作って発信をしていかなければいけないなと思っております。

中学校3年の10月の調査の件も話題になっていますけれども、中学生の希望をベースに募集定員を決定していくということがベースでいいかなと思いつつ、中学生の希望とか社会の産業界のトレンドみたいなのも、踏まえていかなきゃいけない。

その中でやはり既存の枠にとらわれた形で、中学生が答えてしまうような調査を少し見直していく必要があるのかなっていうのは感じるので、実施時期もそうですし中身のところも、より見直しができ、内容がくみ取れるような形になればいいのかなというふうに思いました。

以上です。

【村松座長】

はい、ありがとうございます。関係したところいかがでしょうか？

希望をどうくみ取っていくのか。

安原様の方から事前に提供をいただきました資料の特色ある高校としての広報宣伝活動についてお話をいただいていますけれども、先ほどまでも同様に、とりわけ普通科とですね、そういった子供たちにどう伝えていくのか、補足のご提言等ありましたらお願いできればと。

【安原構成員】

今日松本工業高校の生徒さんがされたプレゼンテーションを中学校で実施すれば、確実にこの学校の志願者が増えると思います。

本当に単純なことですが、もっとそういう宣伝活動、それも生徒主体だと本当にいいと思いますけど、あれは本当に生徒に見せたいなと思いました。何らかの方法はあると思います。普通科との配分ですが、正直言いまして普通科を目指す子は当然大学進学を考えています。塾に通う子は特にそうですが、それも理由は当たり前で、大学卒と高校卒との給与差があまりにも大きい。だからその中でみんなとりあえず大学を目指すという感じになってると思います。

【村松座長】

はい、ありがとうございます。

どうでしょうか委員の皆様、ぜひ様々な観点から、ご意見いただければと思いますけど、いかがでしょうか。

【野村構成員】

よろしく申し上げます。野村といいます。今、コンピュータソフトウェア、そういった開発を経験としてはやっております。2点コメントがありまして、まず最初のどんな学科を、学校の定員ですとかその学科を提供すべきかっていうところで、10月に中学生の皆さんの意見を受け、希望を聞くっていう話だったと思うんですけども、自分が中学生だった頃を思い返しても、もちろんやりたいこととかいろいろあるんですけど、12~3年生きただけで、まだ世の中のことをほと

んどわかっていなくて、どんな可能性があるのかすらも自分でわかってなかったなと思いますし、そういう意味で中学生の希望を聞くのもいいんですけども、やっぱりそもそも県がどういった県にしていきたいのか、今後の県の教育をどうしていきたいのかというのを、県政であったりその教育委員会の皆様がその専門的な知識を持った上で決めていくべきことなんじゃないかなとは思っていて、決して子どもの希望を全部聞けばそれでいいというものじゃないんじゃないかなというのは一点、まず思いました。

もう一つ、皆さんのその高校に入って、そこからの就職したり進学したりとか、その進路の話なんですけれども、僕個人の経験から申し上げますと、僕は中学のときには既に自分はプログラミングがすごく大好きで、これをやっていきたいというふうによく思っていました。高校は、長野市にある県立吉田高校普通科に進学してその後信州大学に入りましてそういう経歴なんですけれども、先ほどのその発表していただいた方の中で、プログラミングが大好きで、そういう仕事に就きたいとおっしゃった方がいたんですけども、僕の今の仕事をこれまでしてきた中で、一緒にエンジニアとして働く方はやはり、少なくとも大学卒業でほとんどの方は大学院修士、中には博士を持ってる方も多いです。特に僕はアメリカで5年、今はシンガポールで働いているんですけども海外でも働くってなると、トップ大学の高い成績のいわゆるGPAですね、そういったものがないとそもそもその資格すら得られない。そういう現状というのはあると思います。何が言いたかったかというとそのやりたいことが、必ずしもすぐその高校に入ってその専門を学ぶといいというものでも、自分の経験上はそうではなくて、やはりその高校で基礎的な学力を身につけた上で、なおかつ大学でその専門性を養ってその先に初めて世界が広がっていったという経験があるので、そういったやりたいことがせつかくあるのにそれが専門の勉強をいきなり始めてしまうことによって、逆に縮まって可能性が縮まってしまうこともあるんじゃないかというのはちょっと心配しています。

【村松座長】

はいありがとうございます。

また先ほどとはちょっと違った角度からのご提案をいただきました。はいどうぞよろしく願います。

【向山構成員】

2点あるんです。まず1点簡単なことなんですけれども、4年前に上伊那では今始めている将来の高校がどうあるべきなのかということについて、約2年半やりまして提言書はもう、県の教育委員会に出しましたので、僕としてはもうこの課題はもう終わっているんですね。

その中で明らかになったことで改善に向けて一歩踏み出したのは、中学生にとって自分の行きたい高校をどうやって選べばいいのかっていうときに、高校を一校一校みんなインターネットで調べたり、あるいは資料をもらうのは大変だよねと。1冊の冊子を作って上伊那にある公立私立全部の高校を、今度はその高校の子供たち生徒たちが自分たちの高校はこんなに素晴らしいんだよ。ということを1冊にまとめて全中学校に配布したんですね。ですから今、上伊那では、その冊子を見れば、上伊那にある県立と私学の高校にはどんな特色があるのかっていうことを生徒、それから先生が、私達の高校はこんな高校ですということが1冊で全部見られます。これがその後改善した一つのことです。今も続いています。

それから2点目が今日の大きな議題と関係すると思われますけれども、今ここでずっと話をすることまた、4年前に上伊那でやった方も同じだと思うんですけども、要は、ふるさとを担う若者をふるさとで私達がみんな育てましょう。

なぜならば、少子高齢化が進んでいる事実があり、そして同時に消滅する自治体がこれから出るかもしれないねっていうことが、ある意味でシミュレーションでもある程度明らかになってきたと、と同時に、学生若者の流出が私達の上伊那でも伊那谷でも長野県でも、約75%、多いところは85%の若者が流出している。つまり、地元に戻ってきません。ふるさとをどうやって担わせるのという、その事の解決をするために一緒になって、産学官でもって我々ができることをやっていこうということで、10年ちょっと前から上伊那では郷土愛プロジェクトというのをやって、学校の先生たちがちょうどキャリア教育というもので、生徒の社会的な自立性自発性、そして自分がやっていけるというそういう人材を育成しなきゃいけないので、ぜひ産業界と一緒にやりましょうねって我々も一緒にやりましょうという形で今、取り組んできています。

ですから私達が取り組んできている目的は、次のふるさとを担ってもらって若者を育てることが目的なんです。その目的を達成するために、その現状、さっき言った、少子高齢化のシミュレーションの結果どうなるのかそして若者の流出がこれだけ75%前後、流出してるこの現状を踏まえて、私達が産業界とそれから教育界と、それから地方行政、それから一般住民とが一緒になって、できることを一つずつ毎年ずっと続けていきたいと思いますという形のプログラムがずっと動いてきています。今日高校生と話をした中で、高校生4校から4人僕たちのテーブルには来ましたがけれども、4人とも進路は全部決まっていますという話で一番若い子は小学校一年生の時に、お母さんと同じように管理栄養士になろうと思いましたがということでした。クラスの中でどのぐらいの人が今、高校3年生で進路が決まっているのか聞きました。自分が社会人になったときに、社会人としての職業観を想定してる人はどのぐらいいるか聞いたとこと、半分ぐらいはいると思いますということでした。逆に言うと半分ぐらいはないんですね。

それからもう一つ考えたときに、私達の故郷で生きていくんだ、産業界、1次産業から3次産業までであると同時に、地方公務員から国家公務員まで公の仕事もみんなあるわけですけども、私達がいま一番エネルギーを投入してるのは、小中高校生に私達のふるさとにはどんな職種職業があるの、ということ、とにかく知ってもらおう。

これが一番大事だと。今日の高校生と話したときに、聞いたんですけども、3年間の中で、親や先生以外の社会人と1時間2時間じっくり話したことがある子いるかと聞いたらたった1人だけでした。それをインターンシップに企業に行って、3日間やりました。あとの3人は、先生と両親以外、社会人としっかり話したことはないんです。

私達が今地元でやることが、それは社会人と子供たちとの接点の場を持ち、そして故郷にはこんなたくさんの種類の産業やこんなにたくさんの新しい職種もいっぱいあるし、そこで働いてるのに大人たちはこんな人間なんだというね。

要するに輝く大人たちと出合わせる場をずっと持ち続けてきてるんですね。子どもたちと輝く大人が出会うと化学反応が起こるんです。今日の質問にもあったんですけども、会社のあるいは職種の内容とか何とかよりも、社会に出て働くってどういうことですかと、どうしてこの仕事を選んだんですか。そこで働いてるときに何が楽しいんですか、何が大変なんですかという人生についての質問もものすごく来るんですね。そういうことを通じて、私たちは君たちが学力をつけて、小中高大学まで行って十数年間学んで、社会人から見ると、その学力を生かすために必要な能力って何だと思う。

いくら算数が好きだ理科が好きだ国語が好きだといって、学校でいい点数とったとしても、社会にでたときに、その学んだ学力を生かす力これは何だと思うっていう、これを一番私達は今重視してるんですね。社会に出て、その学力を生かすために、チームの中で生きていくためにどんな力が必要なんだという。こういうことを中心にした活動を学校の先生たちと、産業界と、それから地域の行政、地域住民の人たちが一緒になって今、十数年続けて、そういうことを一つ一つやってきているんですけど。ですから、ちょっと今日の中学生の希望と今度は県の方が用意する中学、高校の内容のもの、そういったものも大事だと思うんですけども、ここにいる皆さんもそうですけども、中学、あるいは高校で自分の人生の進路がみんな決まってそのとおりの人生を歩んでるって人はそんなに多くないと思うんですね。ですからどんな学科が必要になるかってことも、もちろん大変な大きな課題ですけども、それ以上に私達は地元を知る、ふるさとを知るということ。

ふるさとにどんな働く職種があるのか、またふるさとにとって私の人生にとって大切な価値とは何なのかということ。ふるさとで働いているプロの社会人と接する機会、その舞台をたくさん作る。そのことによってふるさとを知り、そして、学力をどういうふうにかつために、どういう能力が必要なのか。そういうことに気づく。そういう舞台を作るってことがものすごく必要だなというふうに思うんですね。同じ話を4年前にもう、上伊那ではして、県の教育委員会の皆さんに、これが上伊那の結論ですから、また教育委員会がその通りのことを高校の先生たちにきちんと伝えて、一つ一つできるような成果を私達に聞かしてくださいというところまで提言したんですけども、その後4年間何も反応がないんで、やってるかどうか知りませんが、ですからそんなことをね、ふるさとでやることが大事だなというふうに、産業界や働く側から見て感じますので、今日はちょっと皆さんに時間を取ってもらって聞いてもらいました。

【村松座長】

はい、ありがとうございます。ここまでいただいたお話をちょっと少し整理させていただきます。

まず中学生、生徒さんの希望を大事にするっていうことにつきましては多くの皆さんがそれをどういうふうに取り入れるかは別にして、それ自体は非常に大事にしていきたいと。そのときのその選択の段階で、今、安原様それから向山様からもいただきましたが、広報とか情報提供、ここをやっぱりきちんと考えて、より学べるそういう選択としてちゃんとした情報が伝わっていくような、そういった広報とか情報提供というのが一つ大事なんだろう。それからその先の学科構成とかの話としても野村様からいただきましたが、県としてはどうしていくのかっていうそういうビジョンですね。それから、あの向山様からもいただきました。産業があつてそれから行政、教育、地域と一体的になって、この辺をきちんと考えて、先ほどの郷土愛の話とか、それから輝く大人と出会うというようなお話も提言もいただきましたけれども、やっぱりこのところは学校と本当に地元そして産業界、行政とが一体的にここの部分に対応していかないと。単純に学科構成を修正しただけではこの問題は解決しないんじゃないかというですね。特にこの社会人と接する機会をもっともっと設定していくべきではないかと。それが先ほど野村様からも、やりたいことが全て直結するわけではないんだけど、こういう社会人と接していく中で、いろんな見えてくるものがあるんじゃないかと。ここまでいただいたお話ですと、こんなようなところかと思えます。

どうでしょうか、関連しても結構ですし、また、その他の観点でも結構です。ぜひご意見いただければと思います。いかがでしょうか？はいどうぞ。

【阿部知事】

しつこくて申し訳ないんですけど。希望を大事にするっていうのは誰も否定しないと思うんですけども、先ほど野村さんのお話にもあったように、希望を聞かれてもよくわかんないっていう生徒も多いんじゃないかな。要は、自分の希望というよりは、周りがこうだということにどうしても流されてしまう可能性があるんじゃないかなというふうに思います。そういう意味で観念論としての希望を大事にしましょうっていうのはもちろん重要なんですけども。何ていうか、これ入口出口の話で、例えばどういう教育をやるかとかどういう学科構成がいいのかっていうことを考えるときに、あまりにも希望が大事ですっていうことだけ言っていると、その教育界としては持つのかもたないですけども、教育界以外の、例えば産業界とかですね、地域の希望とかいうことを考えたときの、県としては生徒の希望を聞いてやっていますということだけでは、なかなか知事としては説明責任を果たしづらくなってというのが率直な感覚であります。もちろん希望は大事ですけどさっきの調査のあり方とか、それからそもそも生徒はわかってないんじゃないかっていうようなことは、多くの方から言われる、現実的に出ている話ですので。そこはやっぱりしっかり向き合っていく必要があるんじゃないかというふうに思います。

それから、県としてどういった県にしていきたいか、ビジョンに合わせるべきだっていうのは全く私もそう思ってます。であるがゆえに、私もオブザーバーとして、こうやって参画をさせていただいてるんですけども、例えばこれ入口出口論で、入口と出口を一体的に議論しないとなかなか話が進まない気がしてるんですけども。例えばちょっと私が、端的にわかりやすい例として、農業科を出た子どもたちが農林業に就くのが4.2%っていうのをどう評価するのか、農業科を出たから必ずしも農業をやる必要があると私は思いません。だけど、農業科を標榜しながら、でも農業に就く人は4.2%っていうのは何らかの評価はしなきゃいけないと思います。これ例えば農業科の定員はもっと減らした方がいいんじゃないかとか。あるいは農業科を標榜してるけど、実際製造業とかいってる子どもたちが多いんで、農業とは言いながらも学ぶべき内容は、もうちょっと見直す必要があるんじゃないかとか、そういうことまで含めてしっかり議論をしないと、なかなか本当に今の、子どもたちのニーズに合ったり、産業界のニーズに合ったり、地域のニーズに合った高校改革はできないんじゃないかなというふうに思ってますんで。

そういう意味で私は県としての方向性、ビジョンというのは、しっかり出そうと思えば出せます。例えば、長野県は製造業を中心にきてるんで、先ほどの学科別の他県との比較を見ると、製造業が結構低いなというふうに正直思ってるんですけども、その辺はどうしてなんだろうとか、あるいは長野県の場合、農業従事者がそもそも多いですけども小規模農家が多いので農業従事者多いです。これから規模拡大を農業分野としてもっとしていかないと生産性が上がらないと思ってるので、そういう意味では同じ農業科の中でも、むしろその経営的なマインドを持った農業者を育てていかなきゃいけない。そういうことも視野に入れながら農業科をどうするかっていう議論をしなきゃいけないというふうに思います。

もう一つ本質的な問題は、これも野村さんもおっしゃっていただきました。安原さんもおっしゃっていただきましたけども、その大学進学の話はどう位置づけるかっていうことは、これはもう本当に正面から議論しなきゃいけない課題だというふうに思っています。何となく何とか学科出て、その道に就職しますっていうのは、良いようで、先ほど野村さんおっしゃっていただい

たように、本当にプログラミングをしっかりとやりたいと思った子どもたちは、一定程度大学教育を受けたり、大学院に行ってもらったりしなきゃいけないのではないかなというふうに思います。そういうことを考えたときに、長野県の大学進学率は全国の中では必ずしも高い方ではありません。こういう問題、実は、例えば移住者の受け入れとかを議論するときにも、長野県は、例えばそうですね、おそらく伊那でも議論されたんじゃないかと思えますけども。例えばお医者さんの家族が移住してきたいと。長野県の高校に入って、ちゃんと医学部に自分の子ども入れるんだらうかっていうことが、リアリティのある話として、実際にそういう話はかなり言われます。そうしたときにやっぱ他の都道府県との比較というのは必ず言われるので、そういう意味では長野県内だけの議論ではなくて、もう少し全国的な視点とか。あるいは若手経済界の皆さんと話したときに言われたのは、例えば長野県の特徴を出そうとしたときに観光って重要ですよと。今、例えば軽井沢にISAKができたり、白馬にHISができたり、そういう海外からも長野県に学びに来てくれていると。そういう中で、国内の子どもたちだけを本当に相手にしていればいいのかと。もっと海外も含めて、例えば長野県の観光である、日本の観光の、例えばおもてなしだとか学ぶというような観点で、もっとアジアあるいは世界からも来てもらえるような学校を作るってことはあるんじゃないかっていう議論もされてます。

そういう意味で、ちょっとこの入口出口の話は、かなりこれは県として、この学校に多額の投資をこれからしていきます。多額の投資をしないのであればあんまり私が口出ししないですけども、高校再編、相当お金を投入してですね、新しい校舎を作ったりしていかなければいけない中で、この県民の皆さんに、どういうビジョンで長野県の高校改革をやっていくのかということをしつかり語れるようにしていかなければいけないというふうに私は思ってます。そういう意味で、ぜひ、ちょっと踏み込んだですね、議論をしていただければありがたいなというふうに思ってます。

【村松座長】

はい、ありがとうございます。これからの教育に多大な投資をいただくと、その上でのこれからの議論ということでもいただきました。本当にやっぱこれ今いただいた踏み込んだ話、クリティカルな議論が必要かなと思います。実際今、知事の方からいただいた話を、私も一点事務局に質問させていただいた事項もあるんですね。先ほどご指摘いただいた農業科での農林業の就職率4.2%だと。製造業にいつているじゃないかっていうんですけれども。ただこれをよく考えてみますと、製造業の中にはかなり食品系だったりとか、実はこの農業に関わるようなもの、かなりあるんじゃないかと。実際県内でもきのこ系ですとか様々そういう加工系の大きな産業としてあるんですけど。その辺はこれ事務局にお聞きすればいいですか。大体もし現段階で、実はって何かちょっと内訳みたいなのがあるような範囲ありましたら、いただければありがたいんですが。

【事務局】

個別の学校にもですね、照会が必要な部分もありまして、今ここで持ち合わせている数字はないんですけど、少しそういう観点できちんと基準を設けて、その製造業の中で具体的に、農業関連と分析できるものがどれぐらいあるかは、調べてみたいと思っております。ありがとうございます。

【村松座長】

そうしますと今のようなのも踏まえて、例えば農林業が単純に少ないからというだけではなくて、かなりそういう加工系だとか、いろんなところにオーバーラップ。今現在、多分いろんな業種がいろんな領域と広がってやってるところもあるので、少し出口のもとになる資料のちょっと一定の更なる精査というんですかね、整理が必要なのかなとは思いました。ありがとうございました。

今のお話、かなり出口の話にも関連したところもありますけど。はい、では岩本様どうぞ。

【岩本構成員】

はい、ありがとうございます。私も教育に関わるものとして知事、ぜひ投資もしていただけると。そのためにということではないんですが、今回入口出口論ということですけど、やっぱり全体的話聞いてもそうですけど、基本的に入口か出口か、とかですね、生徒のニーズなのか社会ニーズなのかっていう、この2項対立的な発想ではないと思うんです、教育というのは。入口と出口をどう繋いでいくのかとかですね。今の生徒のニーズを尊重するのは当然大切ですし、でもその生徒たちがこれから生きていくこれからの社会のニーズをちゃんと踏まえてそこを繋ぐことをしていく。それが教育の中身とかになっていくということで、どちらかではなくて、どちらも見ながら、それをデザインしていく営みとかですかねそれが教育政策だと思いますので、両方でしょうということだと思うんですけども。当然生徒を中心にしながら。生徒がその先社会で生きていきますので。

そのときに、生徒のニーズの話って再三出てきてますけども、まず生徒の適切なニーズって一体何なのかというときに、希望というのは、基本的には選択基準があって、選択肢があるときにその中で自分の最もこれが適切ではないかというのを選んでいくというのが、意志だったりとか、希望だったりという中で、中学生の中にどれほどそのちゃんと選択基準ですね、自分の中で大切にしたいものとか、自分の持っている個性、天性的なもの、もしくは家庭の状況等も含めて、選択基準をしっかりと育てていく、または明確化していく。

これキャリア教育的な学習なんかはそういった中心になると思うんですけど、そういった部分もありながら、かつ選択肢がしっかりとあると、その選択肢の情報がちゃんと伝わっているという、この条件が揃ったときに、適切な生徒の希望というものを、その子にとって本当により良い学びとかですね、その先のウェルビーイングというところですので、生徒のニーズ、とても重要でこれをちゃんとやろうとするとそういう条件を整えていかないと、何もしてない中で生徒が今こう言ってるからこれでこうでしょうっていうだけではちょっと乱暴だなという意見があったと思うんですけど、やっぱりそれはそうだと思いますし、かつ15歳とか14歳、その中でその後も当然可変性が高いというところですので、生徒のニーズといったときにはそういったことはちゃんと注意しながらですね、使っていないといけないところかなと思います。

一方で社会のニーズって言ったときにもですね、やはり注意するところあるのかなと思います。社会のニーズといったときに今の社会のニーズという考え方というよりは、これからの社会のニーズというかですね、今企業はこれが欲しいと言ってるからそれを提供しますみたいな話というより、その子たちが将来生きていく、5年後、10年後とかですね、その中で本当に必要な力とか、そういった人材の育成という観点というのがやっぱり大事になっていきますので、社会に関しては「これからの」という枕詞っていうかですね、意識しながら議論しないと、今これが足りないとかですね、挨拶できる子が欲しいとか、そう言っている企業の声をですね、直接聞いてそれでいいのかっていうと、必ずしもそうではないというところもあるかなと思います。これが

らの社会のニーズをどういうふうに、どのように把握していくのかというときに、当然社会トレンド、これは世界的な動きだとかをしっかりと見ながらですね、日本の経済だとかの大きなトレンドがありますので、そういったものを踏まえるとともに、知事も言っていましたけども、当然県立高校であれば、県のビジョンですよね、県としてこういう、うちの県はこうなっていきたい、こうありたいんだという、もしくはこういう未来をつくっていくんだという、そういう未来のニーズからどういう教育、どういう力を育てていく必要があるのか、県立高校として、そういう社会全体のトレンドとかですね、大きい流れ世界も踏まえながら、県としてのつくりたい社会像というかですね、そこのバランスを見ながら、県立高校のそれが学科なのか教育課程全体の考え方っていうのをデザインしていくというのが教育政策の基本的な考え方になっていくのかなと。具体的に1個1個の学科どうするかというのは私は申し上げませんが、基本的にはそういう考え方ではないかなというのは、今日の議論を受けてですね、思うところです。以上です。

【村松座長】

ありがとうございました。今、岩本様から、生徒ニーズ、社会ニーズ、ということを綺麗に整理いただきました。産業構造、どんどん変わってまいりますし、現在企業でも学び直すリスキングっていう、そういった変化に対応しようという動きが出てきている。そんなことを考えると、社会ニーズという、先を見ながら考えていく必要があるというのはご指摘の通りかなというのは思いました。

【岩本構成員】

1点だけ、それに関して追加で。教育の場合、私の考えとして地域や社会の担い手とか、産業界の担い手っていう考え方もあると思うんですけど、それというのは、どこかで何か今のニーズで今のニーズを満たしてくれる人が欲しいって言われているような感覚を持ってですね、ちょっと抵抗感を感じる場所があります。やっぱりこれからの社会のつくり手であるというふうに生徒とか子供たちを捉えていくと。これが必要だからこういった人材を育ててくれと、当然、産業界側からも、市町村とか地域からも言ってきますし、その声はしっかりと受け止めながら対応していく必要があると思います。ただそれに応えるだけではなくて、その先につくっていきたい、長野県だとウェルビーイングと言っているとありますが、そういう、その一歩先を見据えた中でどういう力を今の子供たちに付けていくとか、どういう学びをここでつくっていくのかっていう。そのつくり手だというぐらいの意識ですね、長野県の場合、ぜひやっていただきたいなというところです。以上です。

【村松座長】

ありがとうございました。今、入口、出口から段々と一体的になってきて、担い手から作り手というお話をいただきまして、ありがとうございました。

向山さんどうぞ。

【向山構成員】

今岩本さんの方で、産業界、そしてまた産業界が求めるニーズについての話が出ますので、ちょっと僕の考えも聞いてもらえればなというふうに思います。

長野県の産業をみるときに、私たちはいつも振り返るのは150年前なんですね。そして明治維新、殖産興業、文明開化っていう、こういう新しい価値の大転換が行われたときに、長野県の産業人たちは何を考えたのか。ここで当時の養蚕農家、そして製糸業というものをまとめた一つの大きな産業として、世界の中で、日本が今度は欧米列強にきちんと対抗して、成り立っていくために国の力を強くしようというイノベーションが起きるわけですね。ご存知のように、上田地区、それから岡谷地区、ここで製糸産業というものを起こして、養蚕農家の皆さん、そして、製糸産業として日本の欧米列強に対抗する殖産興業としての近代化の中心になってエンジンをきいたのが、長野県信州の製糸業だというふうに思ってます。私たちは諏訪、岡谷の精密、前進の食品の工業、全ての産業界の今一番の大きな原点、経営の原点が、このやはり私たちの3世代、4世代前の先輩たちが起こしてくれた製糸産業だと思ってます。そして明治の終わりから昭和の初めにかけて日本の輸出の約50%以上が製糸になるんですよ。つまり日本の100年の近代化を屋台骨で支えてきたのが、信州の製糸業を起こした人たち、そしてその製糸工場で働いてくれた、信州と、それから岐阜県、山梨県、新潟県等々来てくれた工女さんたち、この皆さんたちが本当に素晴らしい働きをしてくれて、私達が今持っている品質管理、生産管理、マーケティング、これ全て製糸業からみんな受け継いでいます。

要するに、時代が変わって、ニーズも変わる、そしてマーケットも変わっても、長野県のやっぱり特徴っていうのはそのニーズに合ったものをきちんと先取りして、先人たちがそれにふさわしいマネジメントをずっと継続してきたっていう、今日の私達もそういう自負があります。今回のパンデミックのときも、製造業はほとんど倒産しないんですよ、長野県は。そして例えば経営者協会に600社ありますけれども、3年半経って、600社の中で退社したところは1社もないんです。だから、しぶといんですね、長野県の産業っていうのは。岩本さんがおっしゃったように、企業の経営者はみんな、これから10年、20年に対してどういうふうに私達の企業の革新をしていくのかっていうことを、そういうことをものすごく多く感じているし、私達の4世代前の先輩たちが、あの製糸産業を立ち上げて、それが生き残ってきて、業態を変えて今のものはあります。ですから、諏訪、岡谷地区にあるいろんな運送から何から、片倉からみんな独立した人たちが、印刷会社を始めたり、運輸会社を始めたり、こういうやっぱりイノベーションの歴史は、僕は長野県の産業の大切な歴史だなというふうに思うんですから、私はさっき岩本さんの方から、今のニーズに応える人、高卒でも大卒でもくれっていうのは、私からするとそうじゃないんですね。長野県のやっぱり企業の歴史、イノベーションの歴史をちゃんと先輩たちが作ってくれて、私達もそれを受け継いでいく。そうすることによって、地域にいつも雇用を生み出す力を長野県の産業はいつも地域に提供し続ける。それによって生計が成り立ち、地域の祭りや文化が伝承されていく。つまりふるさと全体を作っていくという、そういう経営者が長野県の中には多いと思うし、私達は先輩の生き方がそういうことを一番強く学んでるもんですからね。本質的なニーズに合う人材を送ってくれりゃいいっていう、ちょっとそういう考えの経営者はそんなに多くないってことで、ぜひ岩本さんにはご理解をいただければありがたいです。

【村松座長】

ありがとうございます。先ほどいただいたの作り手から、いま150年の歴史を概観したお話をいただきました。イノベーションの歴史。イノベーションというと私も非常によくわかるんですけども、多分このウェルビーイングで考えたときに、新しい価値を生み出してくるっていうのが、これからの作り手であったりニーズって考える上でも非常に大事だろう。多分新しい価値を

生み出すっていう点でいうと、農業、工業、商業とか、そういったその学科のラベルですとか、その分類そのものよりも、そこでどういう新しい価値を生み出せるのかっていう、そういう形で、学科そのものとかを変えていくとか、コストを変えていくってというのが一つ方向としてはあるのかなっていうか、先ほど知事からビジョンについての話がありましたけども、それに見合ったような形にしていくのも一つの方角かなって思いました。ありがとうございました。はいどうぞ。

【阿部知事】

今の岩本さんと向山さんのお話を受けてたんですけども、まったく岩本さんがおっしゃられるようにですね、今のニーズに対応するのではなく、未来のニーズをどう汲み取るかって非常に重要だと思います。ただ、これだけ変化が激しい中では、なかなかそれにぴったり合うものを予測するというのはなかなか難しいのかなと。その話と今向山さんがおっしゃっていただいた、150年前から培われた遺伝子があるんだよってというお話と繋ぎ合わせると、例えば、私も向山さんが力説されてるように、かなりやっぱり地域、さっきの子供たちに発表してもらったらやっぱり、実際の社会との繋がりがある中で、非常にモチベーション上げてやってもらってます。

そういう意味では、いろんな普通科、職業科かに関わらず、何か長野県として、コアとなる教育を徹底してですね、それはその時代がある程度変わろうとも通用するよと。そういう人間をしっかり教育するっていうことは、ちょっとお二人の話を聞いてて、何かそういう学科に関わらないコアカリキュラム、そういうものが必要なのではないのかなっていうふうに思いました。それでちょっと教育委員会質問なんですけども、どれぐらい高校のカリキュラムっていうのは、自由度がきくんですか。

例えば、具体的な例で言うと若手経済界の人たちはどんな分野でもやっぱりITいるよねと、デジタルスキルいるよねと。それから、やっぱりもうこれからやっぱ英語の使える英語がちゃんとできないといけない。例えば、こういうものと社会体験をするみたいなカリキュラムを長野県共通カリキュラムです、みたいなやろうと学科通じてやるのが可能なのか可能じゃないか、どれぐらいの遊びがあるのか、教えてください。

【事務局】

直接的なお答えになるかわかりませんが、高等学校の設置基準というかその上には学校教育法施行規則等ある中で、例えば、工業科を名乗るには、その専門科目を25単位以上というような定めはございます。あとは、長野県で、知事おっしゃるように、そのコアとなる教育をするために、学科にこだわらないプログラムの自由度があるかということについては、これは十分にありうると。現に本県におきましては、これ高等学校だけではないかと思うんですけど、信州学という名のもとに、各学校が創意工夫をしてですね、地域課題などを学ぶ講座を設けたり、集会を開いたりというようなことは、数年来、続けてきているというふうに承知しているところであります。

【阿部知事】

さきほども村松座長おっしゃっていただいたようになんていうか、看板だけに目を向けてはいけないんだろうなと私も思いますので、何か少しちょっと次回以降、実際のカリキュラムをどう

するかみたいな、今どうなっていて、どう変えていくべきかみたいなこともちょっと教育委員会で考えていってもらえるとありがたいのと、ぜひお取り計らいのほどよろしく願います。

【山下構成員】

ちょっと産業界の方ということで、私、農業に関わっているので農林業につく生徒さんがすごい少ないってところで、少し、そうだよなって思う部分とちょっと残念に思った部分があります。確かに製造業の中にきのこか食品加工が入ってると思うので、その辺りちょっと精査していただきたいっていうのと、これは農業界の方の課題だと思うんですけども、確かに就職して、農業をするっていうのがなかなかまだ職業の選択肢としてない中で、農業っていうのが選択しづらいのかなっていう部分が、せっかく農業科に入った学生さんにとって、就職、その出口がないっていうのは、農業界の課題ではないかなというふうに感じています。

一方で、全産業が共通して求める能力のところに、人間力とか探究力っていうのがあるんですけどもこれ共通してやっぱり、高校生の中では、どの職種に将来つくってということよりも、実際にいろんなことを経験して、いろんな力をつけるっていうことの方が大事なんじゃないかなっていうふうにも感じます。

私自身も工学部を卒業してまして、工学修士をとって、実際にはシステムエンジニアとして働いていたので、全く全然違う、畑違いのところに今は働いているっていうような状況です。しかしですね、学んできたことが何も生かされていないのかっていうと、実際にはやっぱりそうではなくて、情報の面でももちろん必要ですし、農業で言えば、農機具の整備技術っていうとはないですけども、電子とかそういったところに強いていう部分もありますし、こういった知識を得ることっていうのは、どの産業に実際、就職するにあたって必要になるのではないかなというふうに感じます。

あと入口の部分なんですけれども、今、中学生にキャリア教育で何度か、中学校で話をさせていただき、実際に農園の方に中学生が来てくれて、話をするっていう機会をもっています。そうするとですね、やっぱり今、中学生そのキャリア教育の中で、私が講師で行くときに、他に大体10名ぐらいの方がいらっしゃってるんですけども、飯綱町ですね、その町で活躍するプロフェッショナル100人っていう本を出してまして、その中で、中学生がどの人の話を聞きたいかっていうのを選択して、学校の方から依頼が来て話しに行くっていう形なんですけれども、そうすると、地元どんな職業があるのかですとか、実際に働いてる人から話が聞ける場ということで、その後の中学生の進路にとっても良い影響を与えていると中学校の先生からはおっしゃっていただいています。実際に始めて多分5年ぐらいになるんですけども、職業科を選択する学生さんが増えたなんていうことも中学校の先生からは聞きました。入口のところではやっぱり中学生の段階で、もっと、いろんな大人に触れるっていう話ありましたけれども、いろんな話を聞いたりとか、実際に対話をしたりっていう機会を増やすことで、その先に、高校どうするか、さらに進学するのかとか、その大学をどうするかというところに繋がるんじゃないかなというふうに思っています。

【村松座長】

ありがとうございました。今、かなり、出口の終わりと入口と両面のお話をいただきました。

後半もこの感じでかなり話が盛り上がるかと思いますので、一旦休憩を挟みまして、ちょっと休憩短くなって恐縮ですけども、開始は予定通り50分ということで、後半も、今いただいたお話を踏まえながら進めていければと思います休憩の方でよろしく願いいたします。

【村松座長】

そろそろお時間となりますが、再開してもよろしいでしょうか。後半もよろしくお願い致します。

前半のほうでも様々なご意見本当にありがとうございました。当初、入り口の話でしたが、出口の話まで含めての多様な意見、ご要望いただきました。後半も残された時間ですね、出口も含めまして話の方をさらに詰めていければと思います。

最後に山下様の方からいただきました、全産業が共通して求める能力ですね、これ教育委員会さんの方で出口に対応した学びのところで、どんな進路でも活躍できる、こういう力の育成が非常に大事だと。先ほど、阿部知事の方からもこういったものを共通で学べるものは、教育課程の中でどうなのかという話がありました。多分、この辺の話をちょっとオーバーラップする部分かと思いました。

また、プロフェッショナル100人ですかね。高校生というよりは中学生のキャリア教育の話だったかと思います。これも最初にありました入口の話で広報とか情報提供の段階で、今回の話のメインが、職業科の学科の構成であったりとかその定員のお話でございます。そういったものを選択する際に、やはり高校の広報、それから情報提供、また今のような中学校段階でのこのキャリア教育、こういうものが必要じゃないかっていうそんなお話もいただいたところであります。

後半の方の議題としましては、職業科で学んだ生徒が、その専門以外の進路を選ぶという産業構造のお話ですね、農業の関係についての農林業のところも、私のほうでちょっと出させていただきましたけど、この辺の話も含めましていければと思います。とりわけ5ページ目のところで言いますと、この真ん中辺ですね、教育委員会が考える入口出口の対応ということで、入口の対応のはなしとか、出口から見える課題のような話は、かなり議論が進んできたと思いますので、出口に対応した学び、こういったところも含めまして、少し残されたところで議論を深めていければと思います。

では、また引き続きお願いできればと思いますが、いかがでしょうか。小木曾様お願いします。

【小木曾構成員】

前半のところに深く関係しているかなと思って。ちょっと最後、引っ込み思案で言いそびれちゃったんでここで最初に言わせていただければと思うんですが。学科別の就職先で農業科の就職農林業が4.2%っていう話題があがっていたんですけど、ちょっといろいろ考慮しなきゃいけない。製造業であっても食品関連に就職しているかどうかって話もあったんですけど、ちょっと自分が現場にいて、感じも含めて、ここは考慮しなきゃいけないことかなと思うことをちょっと挙げさせていただくと、そもそも求人比率が全国で言ったら、多分、製造が3割と一番多くて、県内、長野県内だと多分4割強ぐらいが製造業だと思うんですね。普通科、農業科、工業科、商業科って見てみて、就職している割合を見ても、普通科は逆に製造業ちょっと落ちているんですけど、大体、同じような割合で、これハローワークから出てくる求人票の割合と同じような割

合になっているのかなというふうに思います。なので、そもそも高校生が出口として就職活動するにしても求人票を見てやると思うんですけど、出口の割合がそういうふうに示されている中で活動だったりするので、ちょっとその比率によってくるのはそうなるのかなというふうにまず思います。あとは、さっき山下さんのお話の中でもあったんですけど、なかなか直接、農家に就職するっていうのって、高校生にはあまりないですよ。なぜかっていうとやっぱり、求人票がないからです。

農業好きな子って一定数いて、この長野県の特徴だと思います。普通科来た子も、本当は農業やりたかったんだ、ちょっと届かなかったけどみたいなそういう話をする子もいるぐらい、農業やりたいって言っている子が一定数いる中で、入って出口見たときに、そのまま就職する農業の出口がないっていうのは、状況としてあるのじゃないかというふうに思います。なので、なかなか難しいところであると思うので、すごく大きな改革が必要なのかなと思いますけど、農業に高校卒業してすぐ就職したいっていう子が就職できる形、地元の農家と繋がる高校生活を送るとか、ハローワークを通しての求人票ではない別のルートの農業に就職できるプラットフォームがあるとかっていう形ができてこないとなかなか難しい部分もあるのかなというふうに思います。

進路担当して就職活動も見ていますけど、あの農業科出た子たち製造業の中でもやっぱり食品加工の仕事にかなり行っているかなと思うのでそれも踏まえて見ていただければなというふうに思います。

あとは、進学している子もかなりいるんじゃないかと思います。農業をもうちょっと極めるとか園芸の方もやりたいっていうのはね、進学している子もいると思うので、その割合も一緒に調べてみると、農業科に入って、それを志すっていうこの数はわからないのかなと思いますね。

進学ってことを踏まえて、カリキュラムのところに話を落とし込むなら、進学するとなると他県に出るっていうことも増えると思いますが、また長野県に戻ってきて農業をやろうとか、自分で何かやってみようと思ってきてもらうためには、高校生活の中でどれだけ地域にアクセスしたことができるかという部分があるかと思うので、その辺がカリキュラムに通じる部分じゃないかと思います。以上です。

【村松座長】

はい、ありがとうございました。

今ご指摘いただきました農業とか求人の問題ですね。これはなかなか高校だけではあっていうところがありますので、全体的な議論が必要なのかと思いました。

またこういう進学も含めた、どのように専門科の中で学んでいくのかっていう出口に対応した学び、ここにも関わるような話なのかと思います。

具体的に教育委員会の方で2点、このあたりに対応した提案をいただいていますけども、専門性の育成であったり、どの進路でも活躍できる、どこに就職進学するかは自らが選択することが大事だということ、このような形でご提案をいただいています。こういったことも含めまして、今の出口問題ですね。引き続きいかがでしょうか？ご意見等ありましたらぜひお願いできればと思います。

はいどうぞ。

【野村構成員】

お願いします。まずちょっと出口のところで、あの前半岩本さんがおっしゃっていた「ニーズだけにそのまま率直に答えてもね」というそのに関して僕はすごく本当にその通りだと考えていて、未来のニーズがどうなるかっていうそこは難しいという話もあるんですけども、一番高校として大事なのはむしろ予測というよりも未来を作り出せるような力を持った生徒を育てられるか、そういったところが大事なのかなと思っています。

その高校の専門分野で学んだものと全然違うところに就職することに関しても、やっぱり違う。むしろ、全然違う分野の専門性を持って他の分野に行くことによってその違った視点が生まれて新しいイノベーションって生まれたりすることも往々にしてあるので、そこに関しては全くむしろどんどんやったらいいんじゃないかなとは思っています。

もう一点。前半で阿部知事が今後教育に投資するというお話をされていて、日本以外にも、実は海外にも目を向けた方がいいんじゃないかというお話を受けて、そこについても少し思ったところがありまして。少子高齢化っていうお話がこの会の中で何度か出てきたんですけども、日本はもうとっくに高齢化社会っていうのは過ぎていて、2007年くらいから超高齢社会にもう既に突入していて、人口も去年だけで80万人減っているわけですよ。

長野県も、長野県の統計を見ると2002年から人口が減り続けています。県外から生徒をどうするか、県外に生徒が出ていったらどうするか、そういった話でも、日本全体で人が減っているんで、そこだけ見ていると、日本全体の人口が減っている中でパイの取り合いみたいな話にしかたならないので。せっかく長野ってすごくオリンピックのおかげもあって観光資源もたくさんあって海外からも結構認識されていると思うんですね。僕もその海外にいる時間が結構長いので、そういったところで出会った友人とかでも、やっぱり外国の人でも日本の長野を知っている、白馬を知っているそういった人って少なくないです。

また、外で出会う長野出身の方もいます。そういう方は何か「信濃の国」が歌えるとかそういう方もいらっしゃるし、やっぱりせっかく長野、日本を超えた外との繋がりを持てる可能性のある場所ですし、そこにもっと目を向けて海外からも学生を集めるとか、長野にいる学生にその他海外に出会うような機会をつくるですとか、そういう日本国内に閉じた話じゃなくて、せっかく投資するならもっともっと未来に繋がっていく、広がっていくような話がなされるといいなと思います。

【村松座長】

はい、ありがとうございます。よりスケールの大きなお話、ご提言いただきました。

とりわけ今いただいた未来を作り出す力をどう育てるのか、先ほどの作り手の話だったり、イノベーションの話というのも関係してくるところかと思えます。こういう形でその従来の学科の割り振りをどうするのかというよりも、従来の学科でどうやって未来の作り手を作り出せるのか。こういう力に変えていけるような、そういった学びを作れるのか、それに対応した学びを作れるのかというのは非常に今のお話を受けて大事な点かというのを感じたところでございます。ありがとうございます。

その他いかがでしょうか。どうぞ。

【赤荻委員】

赤荻ですよろしく申し上げます。すいませんちょっとまだ言いたいことがまとまりきれてないんですけど、初めましての方もいらっしゃるんで、私が一応、校長の赤荻っていう形で紹介させ

てもらっているんですけど、埼玉県出身のおしゃれが大好きな普通の女の子だったんですけど、実は最終学歴が中卒です。

なのでちょっと難しい話とかはできなくて気合と根性でここまで来ました。よろしく願います。

渋谷で育ってきた半分、女子高生の気持ちで聞いてもらいたいんですけど、今日長野県の生徒さんたちのお話を聞いて、4人が4人ともずっと地元をいたってという子たちだったんですよ。他のグループさんわかんないですけど、すごく長野愛が強いなと思って。

私は今日埼玉から来ているので、長野県は旅行で来させてもらったりするくらいなんですけど、懇談会でも2回目参加させてもらって、私自身もすごい長野県大好きです。魅力的なところも結構知っているつもりではいます。

ただちょっと長野県のことを好きすぎるあまり、生徒の子たちがあまり外の世界を知らないんじゃないかなって、ちょっと不安に思いました。なので山下さんの「プロフェッショナル100人」のお話とかすごいいい施策だなと思って、あの渋谷でも、パクらせてもらおうかなと思っているんですけど。マインドの話にもなっちゃうかもしれないんですけど、私が生徒だったら、先生達に何かもっというろんなチャレンジしてもいいよっていうなんか「失敗してもいいじゃん」くらいの、何か背中を押してくれるマインドがある先生たちがいるだけで、何か経験値が大きく上がるんじゃないかなって思っています。

本当に、何だろう。日本のためにじゃないんですけど、先ほど野村さんもおっしゃっていたんですけど、長野が日本の象徴だ、みたいに言われる未来だって全然あると思うんですね。あると思うし、私的には渋谷から日本を盛り上げたいんですけど、長野県でもできることはご協力させてもらおうと思っています。

地元を活性化させる子だけじゃなくて、日本といえばこの子だよねという長野出身の子もいてもいいと思うので、もうちょっと海外のこととか、知ってもらったりとか、今日も私埼玉から長野県の松本駅まで来て、海外の旅行のお客さんすごいいらっしやったんですよ。いらっしやったんですけど、今日あった生徒さんたちは、何か英会話とか全く興味ないみたいな感じで。たまたまかもしれないんですけど、なのでせっかく海外の方が来ていただいていると思うので、何かもうちょっといい感じに関われたりとかもすると思ったので、輝く先輩だったり、大人の方と交流できる機会を小学校だったり、中学校だったり、高校でも何かもうちょっと入れてもらって、外の世界を目指したりとか、長野県を世界中に知らしめたいみたいなマインドの子が出てくるんじゃないかなと思ったので、すみませんちょっとまとまりきってないんですけど。

松本工業さんのプレゼンテーションやっていただいたと思うんですけど、とりあえずやってみようっていう言葉が2ページ目ぐらいにすごく大きく出てたので、県にいる生徒の方たちにも先生方たちにも、「とりあえずやってみようマインド」はもうちょっとあってもいいんじゃないかなっていうお話しでした。

ありがとうございます。

【村松座長】

はい、ありがとうございます。今いただいたお話は世界を知ることであったりとか海外も含めて広い視野を持つと、多分この辺の議論をするときにそれでどんどん外に出したときにちゃんと地元に戻ってきてくれるのかみたいな議論が出てくるかと思います。そういう広い視野を持ちながらも長野県を前半でも郷土愛の話が出てましたけども、そういうような形で地元も愛して少

し前に流行った言葉でグローバルですかね。グローバルな視野を持ちながらも自分たちの足元のローカルなことをやる。そういったことは一つ大事なのかな。

もうひとつは、先生方が生徒の背中を押すという。今回の話の生徒さんをどうするのかというのは、学科構成もさることながら、次の議論になってくるかもしれませんが、先生方のマインドチェンジも大きな課題なのかもしれません。

次、どなたかいかがでしょうか。

【向山構成員】

今の赤荻さんの発言にも関連するので、長野県の教育委員会に質問があるので、教えてください。

第1回目の懇談会の意見にもありますが、社会を出る準備、生きる力、社会発展のためなど、いくつかありますが、長野県の教育委員会は、長野県の高校の先生たちに対し、長野県のために将来はがんばってくださいね、あるいは長野県の故郷に将来は住んでくださいね。あるいは将来は地域社会で生活をしてくださいね。あるいは世界へ出てもどこへ出て日本人としてきちんと日本のことを第一に考えてくださいね。こういう教育って言うのは、なにか統一した考えでやっているのでしょうか。

【村松座長】

この辺は、教育長からいただいてもよろしいでしょうか。

【内堀教育長】

向山構成員のご質問ですが、長野県の場合は、小学校から高校まで、今みなさまからご指摘いただいているような、地域を知るだとか、地域の産業を知るだとか、故郷を知るだとかは、一貫してやってきています。

小中学校は特に強くやってきてますし、高校がこれまで弱いというふうに言われてたんですけども、探究というものが入ってきて、その探究のフィールドが地元だったり、地元企業だったり、そういった形で、高校でも、直接的にインターンシップという形で、インターンシップは確か全ての高校でやってると思いますけれども、インターンシップという形で、企業に出かけていたり、それから探究のフィールドが地域だったりというようなことで、地域を知るということはものすごく大事にしていると思います。それから地元愛とか、何ですかね、世界に羽ばたいていったときに、地元を思う気持ちをついていうのを、直接的にそういった教育をやっているというよりは、今申し上げたような活動を通じて、そういったものが育まれるだろうという考え方でやっているというのが、今の県の教育委員会の考え方です。

【向山構成員】

はい、ありがとうございます。

僕らが少なくとも今ね、地元でやっている目的は、故郷の将来をあなた達が担ってください、で、それは社会人として、もちろん農業を始め、2次産業、3次産業もあれば、お役所の仕事もあったり、公共的な仕事もあるし、自衛隊まであるわけですよ。担ってください、そしてできれば、ここに住んでくださいね、地域には文化的ないろんな素晴らしい資産がある、お祭りもありますと。だから、ぜひ故郷を、未来を皆さんが担って作ってくださいという人材を育成するのが

目的なんです。その後は全部手段なんですよね。そのためには何をすべきかと。故郷のことをもっと知りましょう、歴史も知ってください。あるいは故郷にどんな暮らしがあるのか、どんな文化があるのか、どんな働き口があるのかも知ってくださいというのは全部手段なんです。

今、目的のことを教育委員会に聞いてるんですよ。要は長野県の高校の教育では、長野県を背負って立つ人を育てたいんですということがはっきりしていますか。あるいは外へ出て、日本をちゃんと背負って立つという使命がみんなにあるんですよと。だから、将来の日本を、将来の長野県を、将来の故郷を、皆さんが背負って立つ、そのための教育機関が長野県の高校なんですよという位置づけをちゃんとしてますかっていう質問なんです。教えてください。

【内堀教育長】

はい、今回第4次の教育振興基本計画もそうなんですけれども、教育の目的、学ぶ目的、生きる目的もそうだと思うんですが、これは個人と社会のウェルビーイングの実現というところにあるというふうに考えてます。

もうちょっと具体的に言うと、個人が幸せになるかどうか、それから世の中が良くなるだろうか。それを目指して学ぶんだと、それを目指して探究をするんだと、それを目指して生きていくんだ。そういう考えは明確に出してます。

ですので、言い方は違いますけれども、向山委員さんがおっしゃってることと近いことを考えてるというふうにお聞きしながら思いました。

【向山構成員】

今の内堀さんの話を聞くと、人間としてきちんと生きなさいという人材を育成するのが目的というふうに僕には聞こえるんですよ。僕らは信州を背負ってください、故郷を背負ってください、日本を背負ってくださいというのが目的なんです。それを目的にしなくて、こうやってまた今回もずっと皆さんから意見を聞きますよね。これが今度は教育委員会の指針になって、現場によって、僕らからすると、本当にこれ高校の先生、数千人いる先生がちゃんとその通りやってくれるの、故郷にどの人材を育成してくれるのというときに、本当に今のような、いや、個人の生き方が大事なんだから、日本であろうがアメリカであろうがロシアであろうが、どこでも行っていいんだと、ちゃんとした人間として生きろよと、それだけのように聞こえるんですよ。その中に、故郷のために、信州のために、日本のためにという表現がないんですか。そこを質問してるんですよ。

【内堀教育長】

そうですね。そういう意味では、もしかするとちょっと向山さんのおっしゃってることと異なるかもしれませんがね。やはり一人ひとりがどう生きていくかは一人ひとりが決めていくべきであるというふうに考えますし、それを何か一律に地域のためとか、長野県のためにということを目的として行うっていうのは違うかもしれないですね、教育委員会の考えとしては。

【向山構成員】

僕はそこがね、いつも県の職員の皆さん、とりわけ先生たちと話をしているときでも、一体目的は何で、こういうことをやってるんだろうかっていうときのね、一番の根源的な問題なんですよ。だから、個人が本当に自由人として生きて、一生を地球での3万日の旅を本当にいい人生だ

ったってということは、もう第一義的に必要なことですよね。でもあなたはご縁があって信州伊那谷に生まれて、あるいは佐久に生まれて、松本に生まれて、そして育ててもらって、たくさんのお縁でここに生を受けて、小中高を出たよね。どこで、またさらに次の高等教育機関をどこで受けようとも、ふるさとの恩返しもちゃんと忘れずにねという、こういうことが必ずあって僕はいいと思ってるわけ。第一義的に世界も大事だけでもあなた日本人だよと、まず私達の国、ふるさとの国をちゃんとよくするというを第一義的に考えてもらいたいねと。こういうようなのが私達の、社会人の僕はそういう感覚でいるんですよ。

だけでも、先生たちと話をしても、いや、個人のという、そういう単語がものすごく出るんですけども、故郷のためとか、信州のためとか、日本のためっていう言葉はね、ほとんど出てこないですよ。ですけど、内堀教育長は、いや、それは出さないんだと、自由人として個人として実りある人生を生きてくれりゃいいんだ。僕らはそんなつもりでこういった会議に出てきているつもりはないんですよ。日本のための人材育成ですよ、第一義的に。同じように信州のための大事な教育ですよ。できればそれぞれの皆さんがいる故郷のための人材育成ですよ。そういうのがいつも一緒にあるんですよ。個人としての自由で素晴らしい人生を生きてくついうのと、基本的に日本人なんです。そして故郷にお世話になった恩返しをできれば将来したいです。そういう教育機関が、長野県の県立高等教育の根幹にきちんとあるはずだと思って僕はずっとこういうプログラムと一緒にやってきてるんですよ。

どうしても違和感があるんですよ、あなたの言っている長野県の教育委員会の訴えの最終的な目的は何なのかっていうところに。僕からすると、故郷、そして信州、日本が出てこないですよ。そうじゃないですよ。

【野村構成員】

少しいいですか。あの二人のずっと言い合いが続いて、ちょっと横からすみません。だいぶ向山さんとは僕は立場も意見も違うので、もちろん考え方は人それぞれなので否定するものではないんですけども、まず僕個人の背景で申し上げさせていただくと、僕は中国に生まれて、満蒙開拓で行った祖母がいて、それで中国で、その残留孤児になったので、そういう関係から中国で生まれて育って、9歳の時に日本に来て長野で学びました。なので、長野で生まれたわけでもないですし、その後、20歳までは中国国籍だったので、日本人でもなかった。今は日本国籍なんですけれども、そういう背景があって、で、僕は今長野に住んでもない。ただ僕の両親は今も長野にいますし、僕も長野が大好きでしょっちゅう帰っていますし、今後長野にまたいつか住むこともあると思っています。そういうようなまず僕の個人的な背景があります。その上で、僕は結構何でしょう、愛国教育のような、軍国教育のような、そういうところに、すごく何でしょう、ある種の恐ろしさを、僕は感じていて。

全体主義的に、県のため、故郷のため、ふるさとのために何かする人を育てるっていうことには、僕はかなり違和感を持ちます。やっぱりみんな日本国憲法で守られたその人権を持って生まれてきていて、それ以外のことは全部おまけだと思います。その中で、例えば僕個人としてすごく長野が大好きで、友人に会うと八幡屋磯五郎を持って行って、これいいんだよとか言って、長野とか、よくその故郷を思うような気持ちで、個人の中で芽生えるべきものであるし、もちろん学校教育の中で、そういう長野の良さを伝えるのは当然やるべきですけども、その目的がみんなを必ず長野のために、将来生きていくんだというようなそういう教育は、僕はすごく恐ろしく感じます。

それに、例えば長野が好きの人が全員長野に住んでいたら、すごく怖い世の中だと思いませんか。やっぱり長野が好きの人が日本中、世界中にいろんなところにいる、それで縁があれば、長野にまた来たり住んだりって、どれだけそういう人を増やせるかっていうのは検討して考えるべきだと思うんですけど、みんな絶対長野に戻ってきて長野のために生涯を尽くすっていうふうにそういう教育をしていくべきではないと個人としては思います。

【村松座長】

ありがとうございました。

今のお話、それぞれの、かなり高名的な価値観の部分もあろうかと思えますけども、ただ、今、向山さんが言われていたような故郷の長野を大事にするとか、今、野村さんも言われていた学校教育の中で必ずしもそこはないがしろにされているわけではないと思えますし、ただ、教育基本法とか日本国憲法の今の枠組みからしたときに、内堀先生が言われたような形で、個人の幸せですとか、そういうもので進んでいくっていうのは、ここはやっぱりちょっと教育行政としても、今いただいた話に舵を切るといのはやっぱり難しいのかなというの思うところです。ただ、今、お話しいただいたようなどうやって郷土愛とかそういうものを育てていくのかだとか、そこは本当に大事にしていけないと思えますし、途中でお話も出まして、野村さんからいただいたように、日本だったり、長野だったり、そのところを、そこにアイデンティティを持ってやっていただけるような人を増やすっていうことの教育は、大事だなというのを感じています。その他どうでしょうか。関係したところでも結構です。小木曾様どうぞ。

【小木曾構成員】

すいません。今の話に関連するかなと思うんですけど、現場にいて、向山さんおっしゃったように、地元に対する教育は全然やってるなっていうふうに自分は感覚として思っていて。教育委員会の方針の中にそれはどうなってるのかってちょっと今、思ってたんですけど、今、個人のウェルビーイングの話が出ましたけど、社会のウェルビーイングの方には含まれてんじゃないかなと自分は思うんです。

その社会、自分が住む社会と、そこにいてそれが地元なのかもしれないけど、そこを幸せな形というか、健全な持続可能な形に続けていくために、じゃあ、個人としてとか、人としてできることは何なのかって考えていく、その一番上のところには乗かってないですけど、その中に含まれてくることなのかなってのは、ちょっと私の気持ちとして思っていて、生徒たちには、自分もやっぱり一律して、こうしなさい、ああしなさいっていうのはないかなと思ってるんですけど、それぞれの生徒の中に、私今、坂城高校に勤めていますけど、坂城町っていう軸があってほしい。どこに居てもいいけど、坂城町って軸を持ってるとか、長野県という軸を持っていたり、日本という軸を持って、これからやることに挑んでいってほしいなっていう。それが地元で働くかもしれないし、地元を離れてどこかで何かするかもしれないし、それは個人の良く生きるってどこに繋がると思うんですけど、同時に社会のウェルビーイングっていう言葉も含まれてるので、そこに今出てきたような論点が包括されてる部分あるのかなというふうにちょっと思いました。

【村松座長】

ありがとうございました。はい、では岩本さん。

【岩本構成員】

私も、おっしゃられた意見にかなり共感するところで、私もこの6月に閣議決定された教育振興基本計画の策定の委員させていただいてきた中で、あそこで、ウェルビーイングの考え方というのが個人の今の幸福っていうものにとどまらずに、社会というかですね。個人も当然幸せになっていく、生きていくんだけど、それとともに社会全体のという、この社会の話と、そして今という現時点の話とこれからの未来というこの持続可能性も含めたところですね。

ですから、長野県のウェルビーイングいうのもおそらくそうだと思うんですけど、個人の今だけでいいっていう話ではなく、おそらく個人と社会そして今とこれからっていうこの中で最適な生き方を作っていくということだと思います。その社会といったときに、おそらく向山さんおっしゃられていた、例えばその地域社会というのも一つの身近な社会ですし、先ほどおっしゃられた国際社会という社会もありますし、という中でその社会が地域を全くないがしろにしているということは全くないと思いますし、長野県としてどう考えてるのかわかんないですけど、長野県立高校の設置者として県がやっていく教育のことを考えたときに、長野県ということを含く考えないということが成立するのかわかると、これ私立で世界平和のためにこの学校作りましたみたいな、何かそういう私の理念でやっている教育と、この長野県というシステムの中でやっていく教育の中で長野県というのをどう考えていくのかというのは、私はちょっと答えは全く持ってないですけども、深い問だなと思います。

【村松座長】

ありがとうございました。今の社会、個人だけじゃなくて、社会のウェルビーイングとかなりの部分が包含されてるっていう話ですが、ちょっと残された時間を考えますと今のような目的論の話とともに、本来であります職業科で学んだ生徒たちがその専門以外の進路を選んでもいいですね、この辺のところ、ちょっと最後少しフォーカスしたいと思います。出口から5ページ目の課題のところでも教育委員会さんからご提案いただいているのが、教育委員会としては専門を活かせる職、就職先の確保や最新の技術を学ぶなど、学習内容のアップデートが必要であるという、こういう提言・提案をいただいております。

この辺につきましてですね、少しフォーカスしていければと思いますけれどもいかがでしょうか。先ほど就職先の方につきましては、小木曾先生からいただきました農業の方の求人案内そういったものを、どういうふうに対応したらいいのかっていうご提案をいただきましたけれども、そういったお話も含めまして、特にこの辺の出口話、どうでしょうか。では、安原様。

【安原構成員】

その中でも、工業や農業の魅力を発信するのがすごく難しいと思うんですが、宣伝に関しては今言ったようなことですね。皆さんのご意見を聞きたいと思います。

それに関連するように話したいですが、せっかく生の高校生の声を聞いたので、それが出発点でのお話です。1人南安曇農業高校の子で、非常にもう動物が好きで来たくて入学し、学校もすごく楽しい。でも不満は何もないかというと、その生徒は自分の専門を生かすために北里大学や他の大学への進学を考えているのですが、必要な4単位が取れない。結局どうしても職業科だとその進学を考えると、4単位必要なのだけど、3単位しか取れない現状がある。だからそこを諦めざるをえず、悔しいと言っていました。

出口なんです、例えば、農業科を出た子がすぐに農林業に就くように誘導するというのは、今の時代ではナンセンスな気がします。それよりもそういう子たちが、やはり進学を目指して、もっと専門性を持って帰ってくることを、産業界も求めているというお話ですし、そうすると、一つ何かたたき台でも常に提案したいと思いますが、普通科をもっと農業科とか工業科に入れることはできないのでしょうか。つまり普通科のような学びもできる。工業、例えば大学のように工業科はあるけど、その他の学科もあるように、もっと選べるチャンスを後に伸ばさないと、やはり今の子どもたちは、そもそも選択するのをすごく早められてるんですが、それまでの選択能力はないと思ってます。子どもたちを見ると。それはもう端的に経験がないからです。だから、そういう子たちが、選べるチャンスを作れば、例えば農業高校に行っても、ちゃんと大学にも行ける。工業に行っても大学に行ける。その筋道をつけた方が、もっといろいろな子たちが、優秀な子たちもそこに入って、で、場合によってはそこで高卒で就職するかもしれないし、あるいは進学しても、よりスキルの高い専門性を持って戻ってくるかもしれないと思います。

もう一つ、ごめんなさい。いつのタイミングで言おうか迷っていたんですが、一応、塾の立場としてこれも話さないといけないと思うんですが。話を、論点をずらすようであれですが、公立高校の人气が下がってる気がしています。それはコロナの影響がまず大きかったんですが、コロナで子どもたちが早めに決めてしまう。私立というのは、今言ったような、例えば商業科と普通科があったりして選べるとか、それに進学率が高いってことで今私立の評判がすごく上がってます。これから皆さんでの公立高校をどうするかっていうときに、そもそもこのままだと、東京のように、受験だったら私立とか、本当にそうなりかねないような不安を感じます。やはり私は、公立はきちんと残ってほしいのは、収入に関係なく、進学のある子がやっぱり進学できるような体制があってほしいので。

2点ですね。一つ最初に申し上げましたように、思い切ってもっと普通科の要素を専門の商業科とか農業科にも取り入れるべきじゃないかというのと、このままだと、ちょっと公立の人气はどんどん下がっていくんじゃないかという不安ですね。

【村松座長】

ありがとうございます。今いただいたお話の中でも先ほどの学科別のね、産業分類でありました、あんまりそこに強くこだわられるよりもその後の進学とかも含めた学科、コース、また、学びの選択肢を広げて、ご提案の形からすると総合学科や、ここで言っている総合技術高校とか、これらよりカリキュラムが柔軟になったっていうそんなイメージを提案されてるかと思います。かなりカリキュラムの改革が必要だというご意見かなというのは、感じたところでありませう。ありがとうございます。

その他、いかがでございましょうか。はい、伊佐治様お願いします。

【伊佐治構成員】

私も最初にせつかく高校生たちの意見が聞けたのでそこからの意見を言わせていただこうと思います。

私も安原先生と一緒に4人の、3人の男の子と1人の女の子の話を聞きました。私もちょっとびっくりしたのは、南農出身のその3年生の女の子が、かなりクリアに動物が好きだということから南農を選んで、そしてその中でも動物の、主に家畜が扱われているということでしたけれ

ども、あの彼女としては家畜という切り口だけではなくて、動物をもっと幅広く学べるバリエーションがあれば、私の学びはもっと広がったかもしれないってことを言っていました。

それから、そのことから北里大学を目指しているっていうふうにおっしゃっていましたが、できれば、できたらその地鶏を、信州ブランド地鶏を自分で作れる、そんな開発をしていきたいっていうことまでクリアに、その進学その先の目的まで持っているっていうことがとても私は感動しましたし、そういった願いを叶えていくにはやっぱり専門教育を高校で受けられるようにしておく選択肢は残しておくべきなんだろうと思いました。

ただ先ほど入口で生徒たちの希望という話があったんですが、だとしたら今の専門のその学校で学んでいる子どもたちの希望っていうことも併せて聞いていただくことがその専門科をどうしていくか大きなヒントになるんじゃないかなと思いました。高校3年といっても、かなり皆さんしっかりした考えを持って自分の高校3年の時と比べると、とてもびっくりしました。

それともう1つヒントになったのが、この松本工業高校を選ばれた男の子だったのですけれども、もの作りが好きなので、電気を学びたいと思って、漠然としてここに入ったんだけど、これを極める中でとてもやはりそのことにやりがいを感じているということで、進学をしたいということでした。ただ、極めたいので進学をしていきたいけど、進学のサポートがちょっと弱いということをおっしゃっていました。だからそれは先ほどの知事がおっしゃったように、進学をしたいと思っても職業校であるゆえに進学のサポートが弱いとしたら、そこは少し補強しなくてはいけない部分ではないかというふうに思いました。

それからもう一点松本工業高校の学生さんおっしゃっていたのが、英語の先生とおっしゃっていましたが、授業のやり方が一律にやっていくじゃなくて、必ず自分のわからないところを最初にアンケートをしてくれて、先生はそれぞれの生徒がわからないところを個別にきちんと丁寧に教えてくれるから、この授業がとても好きなんですっていうことをおっしゃっていました。だからそこもヒントにしていくべきかな、というふうに思いました。

それから梓川高校の普通科を選んだ男の子がいました。彼だけが就職をするということだったんですが、もう就職のこともかなりクリアに考えていました。高校3年生なんですけどしっかりしているなと思ったのは、他の選択肢は考えなかったのですかって安原先生がお聞きになったときに答えていたんですけれども、もちろん工業系といいますか、そういった技術系のことを学びたいと思ったけれども、普通科に進んだのは、これからは機械化が進んでいくので、その基本的な技術を学んでも、それをどうしていくかっていうことを普通科で広く学んだ方が、例えば就職をした後、そういったことが出てきたら自分で学びながら、その専門的なことを極めていけば働きながら学びたいということクリアに答えていました。そして今就職活動しているということで、とてもそれは頼もしく思いました。

4人ともやっぱり選ばれた生徒さんなのかな、だからこんなにしっかりしているのかなとも感じましたけれども、とても頼もしく思いました。

ただ一点気になったのは、さっき赤荻さんがおっしゃってましたね。4人ともここ信州、この地元でこれからも生きていきたいと。進学の話は別としてだと思うんですけど、そこは私としてもちょっと気になったんですね。私達の時代は、東京に出て行きたいと思っている子は多かったと思うんですけど、でも、私もあの松本で育って、東京に進学して戻ってきたんですけど、若い頃は思わなかったのですが、外に出ることで、その自分のここが好きだったんだっていうことを再認識したりとかそういったことなので、やっぱり外の世界を私は若い人たちはどんど

ん見てもらって経験してもらって、そしてこの地元愛っていうものを育てて欲しいなと思っています。

それから先ほどの向山先生と内堀教育長の話でちょっと感じたことは、私はやっぱりひとりひとりのウェルビーイングとかっていうことが大切にされて、1人ひとりの人権とかそういうことが大切にされて初めて地元愛っていうものは自然に育まれるものじゃないかなっていうふうに感じています。まずそこがあるべきではないかと思いました。はい、まとまらないですけども。

【村松座長】

はい、ありがとうございました。高校生の生徒さんとのお話を踏まえてのご意見ありがとうございました。私も非常にしっかりしているなと感激しましたし、今いただいたような形で、その進学も含めた支援体制、カリキュラムにも関わってくるかと思えますけど、そういった部分の検討が一つ必要なということ、それから授業改善されている先生の丁寧に対応されているようなお話もありましたけど、授業そのものをどのように変えていくか。

最後いただいたこの外の世界の話ですね。私どもの大学生もそうなんですけども、逆に我々が地元の大学でございまして、ここに地元から進学した子たち、今でいうと、そのまま地元っていう。逆に今学生たちがやっているのは、海外に出てた、昨年も私もスウェーデンの大学で提携しているので一緒に学生たちも行ったりしましたけども、そういった地元にいながらもいろいろな外の世界を知ったりとか広げていくっていうことは、これなんか十分可能だと思いますし、これは本当にカリキュラムとかですね、その高校の学びの中でも外の世界を広げて、視野を広げていくっていう、先ほどの進学先のサポートとともに、必要なのかなと今のお話聞いていて思ったところでした。

いかがでしょうかちょっともう残された時間もだいぶ少ないので。はい、どうぞ。

【阿部知事】

はい、ちょっと皆さんのお話を伺っていて3点をお話したいと思えますけど、一つはまず先ほどちょっと言及した進学の話で。教育界だけで議論しているとあんまりこの進学の話が出てこない気がしているんですけど、綺麗な話として出てくるんですけども。例えば先ほど言ったように医学部の進学者数ってどれぐらいなのかですね、あるいは毎年週刊誌で大学合格者高校別ランキングみたいにやるのが、あそこいい悪いの議論はありますけども、少なくとも大学受験を目指して多くの子どもたちが塾通いをされているというのは事実ですね。こういう状況の中で、進学のあり方ってのは本当どう考えるか、それからさっきの職業高校から大学進学を目指すような子どもたちをどうサポートしていくのかっていうことは、相当真剣に議論しないといけないのではないかなと思います。私は、高校は都立高校で、もう学校群制度導入でガクッと都立高校の人氣も落ちたし能力も落ちたと言われている中で、今また少しずつ都立高校復活しています。進学重点校っていう制度を作ってガンガン頑張ってください。そういうことがいいのか悪いのかっていうことの議論は、少なくともすべきだというふうに思っています。

やっぱそういう進学のために高校があるんじゃないから、そんなことやらない方がいいっていう結論もあると思いますし、だけどそれも子どもたちの希望なわけだね。医学部行きたいとかあるいは例えば海外の大学行きたいとかですね。そういう生徒の希望を叶えるという観点からやっぱそういうことも必要なんじゃないかっていうことが、やっぱり議論をして、ちゃんと結論を出さなければいけないんじゃないかなというふうに。そういう意味でちょっと進学のあり方、さ

つき言ったように進学率がもっと上がった方がいいのかなと思いますかみたいな話とか、あるいは職業高校における進学のあり方をどうするのかとか、あるいはもう海外の大学に直接行っちゃう子どもたちも増えている中で、この進学の大学進学っていうのは我々県としてどう考えるのかということが、かなり出口の論議としては重要だなというふうに思っています。まずそこはぜひ多くの皆さんご意見いただきたいところです。

ただ2点目の学科のあり方のところですが、ちょっとしつこくて申し訳ないけど、平時で高校再編とかをしないときであれば、就職先の確保とか、学習内容のアップデートって仕方ないのかなっていうのが私の感覚ですけども。今学校の統合とか再編しようとしている中で、これから10年後20年後30年後を見据えたときに、学科の再編とか学科の在り方を変えるとしたら今しかないと思っています。抜本的に変えると。もちろん、いやあんまり変えなくていい、総合技術高校のような工夫もされているのでそこはその程度でいいんじゃないの、っていう考え方もなくはないと思いますけども、そこもちょっともう少し突っ込んだ議論をしておかないといけない点ではないかなというふうに思っています。

最後3点目ですけども、生徒の希望を叶えるっていうその入口のところの生徒の希望を把握してっていうところが先ほど議論されましたけども、学校に入った後、自分の適性ちょっと間違えちゃったな、っていう子どもたちって絶対私はいると思うんですよね。そうしたときにやっぱり公立高校同士はもっとトランスファー簡単にしやすいようにするとかですね、何かそういう工夫もしてあげないと、なかなか子どもの若い段階で、ずっと一度決めたらもうそれで頑張れっていうのも、酷な部分もあるかなというふうにも思います。そういう意味でちょっとその学校を途中で変えるみたいなことも、少し柔軟性を持たせる必要があるのかなと思うのと、入口の話に戻っちゃいますけども、そもそも子どもの数が減っている中で、高校入試ってのはどこまでやるべきで、どこまでやらなくていいのかっていうようなことも。極論すれば高校まで義務教育化するというような考え方ってなくはないので、高校入試をやった方がいいのか悪いのかっていうそもそもの理由も多分あるんだと思うんですよね。

そういうことも含めてちょっと入口出口のところは、何て言うか生徒の希望とかを叶えるという観点で、少し論点としてはあるのかな。長野県の場合は中高一貫教育がまだ数少ない状況になってますけども、やっぱり高校受験を省略した中学から6年間一貫でやることのメリットデメリットもあると思うんでそういうことも検証しながら、この入学試験のあり方とかトランスファーのあり方だとか、そういうことも少し検討する必要があるかなというふうに思います。以上です。

【村松座長】

ありがとうございます。今知事の方からいただきました進学のあり方ですね、先ほどの職業科の中において進学は大事だっていう話と、先ほどいただきましたランキングだとか話し、これは大学からすると高大接続をどうするのかっていう問題ありますけれども、今回っていうよりもこの会議の先のところでこれ多分大きな論点になってくるかと思いますので、今いただいたお話の方はぜひそのところでも議論できればというふうに思っております。

それからまた入試のお話、それから学科の再編どうするのかというようにところもなかなか明確な解は出てこないところではありますが、少なくとも今日のお話ですと、皆さんこの中身そのものをやっぱ旧来型ではない、アップデートが必要だ、学習内容ですかね、その学科の中身そのもののアップデートが必要だっていうところはかなり共通ご理解をいただいて、その後の看板だ

とか、この辺をどうするのかっていうのはもう少しちょっと詰める必要があるかなっていうのは思いました。

残された時間もわずかになってきました。はい、どうぞ。荒井様。

【荒井構成員】

最初に改めてデータの確認をさせてください。5ページ目の右側になりますが、公立高校生の進路状況について記載があります。令和3年度と表記されていますが、この数値の推移はほとんど変化がないものとして捉えていいのか、改めて教えていただけますか。

【事務局】

進学、就職の内訳につきましては、資料16ページをご覧ください。県の教育委員会として教育委員会定例会に担当課から報告したものがございます。進学対就職のトレンドというものは、ここ数年大きくは変わっていない状況です。ただし、4年制大学進学率については、この2年間においては過去最高を更新しています。

少し逸れるかもしれませんが、先ほどから外の世界をというお話がありますが、4年生大学に限っては、80%弱の卒業生が県外の大学に進んでいます。県内の大学の数の関係もあるかと思いますが、一応参考までにご案内します。

それから進路の状況ですが、学科構成も例年、大体同じような傾向です。先ほど現場で進路指導担当をされている小木曾委員のご発言にもありましたが、高卒の求人で多数が製造業からで、その中で生徒が様々な判断をするので、人気のある企業や製造業に就職する生徒が多いという状況は否定できないと思っています。以上です。

【荒井構成員】

ありがとうございました。

ではそれを前提としながら、いくつかコメントしたいと思います。

まず、冒頭に、生徒の希望のエビデンスは何かという問いに対して、第1回予定数調査を挙げられておられました。この調査は10月に発表され、進路指導上の影響はほとんどないとお話でしたが、この調査は、募集定員発表時期から逆算して、ある意味、この時期に実施せざるを得ないという理解でよろしいでしょうか。

【事務局】

その通りです。募集定員数策定の際の一つの資料にもなっています。

【荒井構成員】

ありがとうございます。

生徒の希望を大事にすることはとても重要なことですが、生徒の希望のエビデンスが、この第1回予定数調査でよいのか、皆さんがそれで納得しているのかは再検討も必要かと感じています。エビデンスの頑強さとしては弱い印象を持ちました。

入口と出口という点に関して、入口にいる彼ら彼女らからすると、情報が少ない、学校や教育活動の姿が可視化されていない、従って、もっと情報を知りたいというニーズがありそうだというお話しでした。他方で、出口に関して、学んだ学科と一見すると関連が乏しい職業へ就職され

ている状況があるということをもぐつては、そもそも魅力がある・ないというレベルよりもむしろ求人票における選択肢の状況に進路を規定する要素が大きいということでしたら、その運用を改善することで、就職状況が構造的に変わる可能性もあるかもしれないと感じました。ここまでが感想です。

その上で、資料5ページの真ん中、「出口から見える課題」に関してコメントします。

まず一つ目が、そもそも論です。出口から見える課題、あるいは課題設定がそもそも適切かどうかです。堀井委員の資料にもありますが、学んだ学科と関連のない職業への就職状況があることなのですが、そのこと自体本当に問題なのかを考える必要があります。他の学科を見ても、就職先は製造業が1位になっています。少なくともその学科が謳う、例えば、農業科の場合は農林業となりますが、これも4.2%で1位ではありません。工業科に関しても、建設業は2位、商業科は卸売小売が2位となっています。言い換えれば、ここでの課題設定は、物事を学科という括りで捉える思考になっているきらいがあります。今後、学ぶ学科で進路のあり方が決められてしまうということ自体ナンセンスという話にもなりうるのではないかと感じています。

2点目は、キャリア理論に基づくコメントです。産業界の人材不足に十分貢献できない恐れがあるということでしたが、貢献するということと地元に着していることを並べた場合、そもそもそうしたことは外的要因によってコントロール可能なことなのか、コントロールすべきなのかが問われてきます。むしろコントロールしていくという姿勢自体が、今の若者にとってその業界に対する評価としてマイナスに作用することもあるのではないのでしょうか。現在の若者は多様性が満ち溢れた「働きやすさ」と「働きがい」の両立を実現できるキャリアを展望していると思うので、将来のキャリアの多様性を歓迎しない場には惹きつけられないという指摘もあります。中学生や高校生や若者のキャリア発達は、やはりかなり可変性が高いものとして捉えた方がいいと思います。こう考えると「今」の中学生の希望やニーズだけを考慮して設計するのも不十分ですし、「今」の産業界の希望ニーズだけを考慮して設計するのも限界があるということになりますので、結論としては、未来のニーズを県が示す必要があるということになると思います。そして、県の未来のニーズは何かというと、個人と社会のウェルビーイングを増やす当事者を増やしていくということになると思います。

最後に、3点目ですが、固定的な学科構成が生徒の希望を良くも悪くも誘導している可能性があるという点については同意します。であるとすれば、専門科であっても当然進学のためのチャレンジは制度として可能なようにしていくべきだと思いますし、進学希望者に対するケアをきちんと充実させていくというのは、学習権保障という点においてもとても大事なことだと思います。また、こうした問題意識を前提とするならば、学科構成の変更だけでは対応しきれず、カリキュラム編成にまで手を入れなくてはならないことになるはずで。

教育委員会からは、「教育委員会としては専門を生かせる就職先の確保や、最新の技術を学ぶなど学習内容のアップデートが必要」だご提言をいただいておりますが、例えば、学びを「対象」と「方法」に分けた場合、「対象」に関しては、もっと専門的なことをとことん学べる仕組みを構築していくことが必要だと思います。「方法」に関しては、学科に関わらないカリキュラムや、いわゆる「汎用的能力」の育成の機会を増やしていくべきだという議論があります。先ほど「信州学」をご紹介いただきましたが、これはどちらかというと「方法」ではなく、「対象」の共通性として設けられたカリキュラムだと私は捉えていますので、「方法」に関しての学びについては更なる検討の余地があると思います。「方法」を学ぶことに注力すべきとなると、いわゆる「ジェネリックスキル」の検討となりますが、文章の書き方やプレゼンの仕方だけを単純に

学ぶといったジェネリックスキルの議論は「規格化」「標準化」と隣り合わせですので、学習者にとって「学び」として面白さを感じないという可能性も出てきます。やはり「対象」と「方法」の両者が結びついて学びの面白さや深まりが出てくるはずです。

最後に、本日の高校生の声を聴かせていただく場で、3年生の彼ら彼女らからは、公開実習を増やしてほしい、アウトプットする機会を増やしてほしい、インターンシップを増やしてほしい、フィールドワークを増やしてほしい、地域との連携を増やしてほしいとの声が多くありました。学校の外に飛び出て、他者との関わる機会をもっともっと増やしてほしいということ、口を揃えて言っていました。

いずれにしても、高校現場としては、「学びがい」と「学びやすさ」の両方の検討が必要だと感じました。以上です。

【村松座長】

ありがとうございました。

今いただいたお話も含め全体的な整理をさせていただき、終了したいと思います。

まず、入口の話について、生徒の希望というものは、それ自体は大事にするものの、その基礎データの多角的な検討・整理をすべきではないかという意見がありました。それから、広報、情報提供の機会については充実させる必要があるということですが、高校生の段階だけでなく、中学生等の段階を含めての提案をいただきました。重要な要検討項目です。学科構成については、現在の学科別の就職先のデータを切り口に議論を進めていくことは難しいというご意見も踏まえ、県として、これから、未来の作り手を育てていくためにはどのような方向性で進めばいいのか、そして、現状を変えるには、学科の看板を替えるだけは私も難しいと思っていますので、カリキュラムの中身まで手を入れなければならないのではないかとのご意見をいただきました。フレキシブルで、進学も含めたサポートであったり、公開実習とかフィールドワークなどの社会との接続であったり、そのような部分をもっと充実させていく。カリキュラムの改善、学び方の改善というのは、実は入口出口問題のかなり大きなウエートを占めているのではないかと感じました。そのようなことから、最終的に社会のウェルビーイングということで、地元、長野県そして日本も含んだ社会全体が幸せになるような方向に進んでいければいいということです。

十分にまとめきれませんでしたでしたが、本日いただいたご意見を事務局で整理いただき、次の議論に繋げていただければと思います。本日の議論はここまでとさせていただきます。

最後に知事から何かありますでしょうか。

【阿部知事】

はい、村松座長はじめ、皆さま方には大変熱心なご議論いただきましてありがとうございました。

論点もだいぶ見えてきたのかなというふうに思います。ちょっと地域等の連携の話、あまりコメントしなかったですけども、最後荒井先生もおっしゃっていただいたように、地域側とか企業側から、教育機関との連携はもっとしなきゃいけないって切実なニーズが、かなり私のところへ届いていますので、そういう意味では学校とその地域とか企業との壁を、ちょっと低くすることが必要かなと思います。

例えばそういうコーディネーターする人材を、もうちょっとちゃんと確保していかないと、さっきプレゼンしてもらった生徒たちに聞いたら、やっぱりまだまだああいう機会少ないって話なの

で、かなりそこは重要だと思うので、さっき向山さんが問題提起されたように、これちょっと価値観論争にあまり私が介入しないほうがいいかもしれませんが、結構教育って振れてきてるんだと思うんですね。かつての愛国・軍国主義的教育をしっかりと頑張れってときから、今はどっちかというやっぱり個人の主体性を尊重している。私はそのこと自体は必ずしも悪いことじゃないと思っているのですけども、ただその一方で、先ほど申し上げた生徒のニーズも、地域社会のニーズも、何か学校と地域がちょっと遊離しちゃってんじゃないの、もうちょっとコミュニケーションをとらせてもらった方がいいよねっていう声が、かなりあるのは事実だと思いますし、やっぱりグローバル社会になればなるほど、実はどっか足元をしっかりと固めるっていうことが、それぞれの人材が世界で活躍していくために、実は重要なんじゃないかなというふうに思います。グローバル化へ進めば進むほど、その地域固有の価値って、長野県ってどんなところなのか、やっぱり語れないと、世界でも通用しなくなっちゃうんじゃないかなというふうに思いますので、そういう観点で先ほどの議論は、もうちょっと統合可能な議論ではないのかなというふうに私は思って話を伺っていました。

もうちょっと時間があれですので、今日かなりいろいろ踏み込んだお話をいただきましたので、これ教育委員会の設置した懇談会なので、私がまとめますと言っちゃいけないと思いますが、教育委員会にも相談してですね、次なるステップと考えていきたいと思いますので、よろしくをお願いします。どうもありがとうございました。

【村松座長】

ありがとうございました。

また今日の話、さらに深めていただければと思いますので、また次回以降もよろしくをお願いします。以上をもちまして本日の会議事項は終了となります。進行をお返しいたします。

【事務局】

はい、ありがとうございました。事務局から2点、連絡がございます。

まず、次回懇談会の日程についてでございますけれども、また改めて皆様方に調整をさせていただきますので、よろしくお願いいたします。

2点目、冒頭申し上げましたが本日の議事録につきましては、県のホームページで公表する予定でございます。皆様には事前に掲載内容の確認をさせていただきますので、よろしくお願いいたします。

それでは本当に長時間にわたって、熱心なご議論ありがとうございました。以上をもちまして本日の懇談会を終了いたします。ありがとうございました。